

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12979

研究課題名(和文) ロシア・アヴァンギャルド散文の変遷史：1920年代ソ連文学の歴史・理論・美学

研究課題名(英文) Russian Avant-Garde Prose: History, Theories, and Aesthetics of Soviet Literature in the 1920s

研究代表者

古宮 路子 (Komiya, Michiko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教

研究者番号：00733023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、1920年代のロシア・アヴァンギャルドの文学を、詩的散文、パロディー散文、ファクトの文学、の3局面に分けて研究するものである。研究成果は、国内外の学術誌、論集、学会等で発表した。代表的な成果として、¹については、詩人クルチョーヌィフの1920年代の動向を調査し、国際学会で報告を行った。²については、レフにおけるパロディー散文の時期に関する論文を、国内の学術誌に掲載した。³については、ファクトの文学の成立プロセスを明らかにする論文を、国際論集にて発表した。また、関連研究者3名をロシアとイスラエルから招聘し、東京大学と北海道大学にて講演会を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシア・アヴァンギャルドの文学は、日本国内でも盛んに研究が行われてきた。だが、従来の研究は、1910年代の詩の時期に関するものが多く、1920年代に散文が主要なジャンルになったプロセスについては、あまり注目されてこなかった。他方、国際的な研究動向としては、アヴァンギャルドの散文の研究は、ロシアでは文学史研究の枠組みで取り組まれることが多い一方、欧米では文化史や美学との関わりについての研究が行われるという、方法上の乖離が見られる。アヴァンギャルドの散文を、文学史的観点からも文化史的観点からも、ともに問題とする、本研究の成果は、当該研究領域においてロシアと欧米の橋渡しになるという意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This research project is to study the literature of the Russian avant-garde of the 1920s in three phases: (1) poetic prose, (2) parodic prose, and (3) literature of fact. The results of the research have been published in domestic and international journals, treatises, and academic conferences. As a representative result, regarding (1), the activity of the poet Kruchyonykh in the 1920s was investigated and reported at an international conference. Regarding (2), I published an article on the period of parody prose in LEF in a domestic academic journal. Regarding (3), I published a paper in an international journal that clarified the formation process of the literature of fact. I also invited three researchers from Russia and Israel to give lectures at the University of Tokyo and Hokkaido University.

研究分野：ロシア文学

キーワード：ロシア・アヴァンギャルド レフ ポスト革命期 マヤコフスキー トレチャコフ

1. 研究開始当初の背景

ロシア・アヴァンギャルドについては、国内外において、既に豊富な研究がある。国内研究では、桑野隆や大石雅彦らが中心となって、その全容が明らかにされてきた。また、特に、1920年代のアヴァンギャルドの中心的グループ「レフ」の活動については、たとえば、アメリカ合衆国の研究者 H. ステファンや N. コルチェフスカが通史的に解明している。他方、ポスト革命期ソ連文壇におけるいわゆる「文学闘争」の歴史の研究は、とりわけ近年大きく脚光を浴びている領域であり、たとえば、イギリスの研究者 E. ドブレンコやロシアの研究者 N. コルニエンコはその第一人者である。本研究は、そうした数多くの先行研究を基礎としている。

本研究が出発点とするのは、アメリカ合衆国の研究者 H. ステファンの指摘である [Stephan, 1981]。様々な芸術分野にまたがるレフの活動を、特に文学について通史的に論じたこの著作の一節で、ステファンは 1920 年代のレフの散文の変遷に言及している。アヴァンギャルドの文学における中心的ジャンルは当初の詩から 1920 年代の 10 年間に徐々に散文へと移り変わっていったが、このプロセスでは散文の様式自体も、1) 詩的散文、2) 欧米の大衆的作品のパロディー散文、3) ノンフィクションの「ファクトの文学」というように、大きく変動していったというのである。

ステファンの指摘は先例のないもので、アヴァンギャルドの散文を巡る動向を解明するうえで大きな手がかりとなる。その一方で、この研究者の議論は、基本として、散文の変化を「実験精神」というアヴァンギャルド芸術の内的論理によって説明づけており、あまり広がりを持つに至っていない。そこで本研究は、レフの散文の変化のプロセスを、同時代の文学史的動向といった外的要因や、1920 年代に飛躍的な発展をみていた美学理論との相互関係に照らして解明する。そして、そこからさらに視野を広げ、レフの散文についての活動を中心に、ポスト革命期のソ連文壇全体の基調を明らかにすることを目指す。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アヴァンギャルド文学の展開のプロセスを、特に散文ジャンルが活況を呈した 1920 年代について、文学闘争や文学理論の発展という当時のソ連文学をめぐる状況の中で捉えることである。

本研究の独自性・創造性は、アヴァンギャルドの散文をめぐる活動を中心に、1920 年代ソ連文学の歴史、理論、美学をトータルに解明することを目指す点にある。研究を社会主義リアリズム前史と位置づけ、1930 年代に制定されたこの芸術の規範に先立つ 10 年間に見受けられた予兆を探り、アヴァンギャルドをはじめとする諸グループによる 1920 年代の活動と後の規範との関係性という、現在に至るまで諸研究者の見解が分かれる議論についての考察も行う。

アヴァンギャルドの文学における当初の中心的ジャンルは詩であったが、1920 年代には散文ジャンルが次第に影響力を増して、ドキュメンタリー散文である「ファクトの文学」が、レフの基本的路線となった。このような散文の隆盛の背景は、アヴァンギャルド内部の進化によるのみ説明づけられるものではない。革命後のソ連文学界における、散文ジャンルの爆発的開花という外的要因もまた、レフをこの方向へ向かわせる原動力であった。

1920 年代のソ連文壇は、それぞれが独自の文学理論に立つ多様なグループが割拠する状況となっていた。なかでも大きな影響力を持っていたのが、1) アヴァンギャルドのレフ、2) 文学活動家ヴォロンスキー率いる「峠」派、3) プロレタリア作家組織、の 3 グループである。この 3 者

をはじめとする様々なグループは、雑誌や新聞といった定期刊行物や自前の論集などの文芸メディアを通じて、自説の普及に努めるとともに、他グループに対する激しい批判を行っていた。また、諸グループは後ろ盾を得るべく政権への接近を図り、文壇のヘゲモニー掌握を狙う野心的グループも存在した。こうした「文学闘争」の機運の中で、新しい国家にふさわしい文学の方向性として議論の中心になったのは、散文のジャンルであった。

注目したいのが、文学理論をめぐる議論において、諸グループは単に非難の応酬を行うのみならず、論敵の批判を通じた逆照射的な自説の形成や、かつては論難していた主張の遅ればせな吸収・同化もまた、行ったことである。つまり、諸グループの理論形成にかかる論争の影響は見逃せない。

そこで本研究は、アヴァンギャルドの散文が、どのような議論の応酬の中で形作られていったのかという、論争の時系列に着目し、「詩的散文」から「パロディー散文」を経て「ファクトの文学」へと至る展開の軌跡を追う。「文学闘争」の舞台となった定期刊行物や論集、会議の議事録といった一次資料を時系列の観点から検証し、文学理論をめぐる論争がいかなるプロセスを辿って進展していったかを明らかにする。考察においてはまた、1920年代に飛躍的発達を見た、パフチン・サークル、フォルマリズム、生産主義、マルクス主義批評などにおける文学理論の展開についても、影響関係を参照する。これらの理論は「文学闘争」の立役者達が念頭に置いていたものであり、特に後の3つはレフに強い影響を与えているため、アヴァンギャルドの散文の形成との関連性についての考察が欠かせない。

3. 研究の方法

本研究は、1920年代のアヴァンギャルドの文学を、詩的散文、パロディー散文、ファクトの文学、の3局面に即して検証する。その際には、特に、代表的3グループである、レフとヴォロンスキーの派閥およびプロレタリア作家組織の関わりに注目する。

詩的散文は、1920年代前半に、レフが言語実験の領域を詩のみならず散文へも拡張したことで登場したが、その過程では、ヴォロンスキーが支援していた「同伴者」と呼ばれる非党員作家が特色とした「装飾的散文」が出発点となり、その刷新が目指された。したがって、「装飾的散文」が当時の文学において帯びていた影響力や、レフの同伴者に対するスタンスが、検証の中心となる。これらの問題については、ヴォロンスキーが編集を務めた雑誌『赤い処女地』についての研究 [Maguire, 1968] などを参照しつつ、アーカイブ資料に当たりたい。また、1920年代初頭に大きな社会的影響力を持っていたプロレタリア詩との関連性についても調査の対象とする [Mally, 1990]。加えて、3グループ以外にも、レフに近い前衛の立場から散文に取り組んでいた非政治的グループ「セラピオン兄弟」との関わりも検証したい [イチン、2011]。

1920年代半ばにパロディー散文にレフが取り組んだ背景を解明するには、ヴォロンスキーの唱えた19世紀古典文学への回帰に対してレフがとった対決姿勢について考察する必要がある。レフの同人達が欧米の冒険物をパロディー化した作品を生み出したのは、古典文学の心理主義に対抗しようとしたためであった。この問題について、レフの機関誌『レフ』の論文や、フォルマリスト達の著作といった一次資料を参照しつつ明らかにする。さらに、レフが参照した1920年代の欧米の大衆的作品のロシアにおける受容についても、当時の出版物を調査する。また、1920年代後半には、プロレタリア作家組織が、古典を模倣した作品作りを唱えるようになったが [コルニエンコ、2010]。こうした方向性とレフのパロディー散文の発想の共通性についても考えたい。両者に共通する、他の形式の文学を手本として新しい文学を作り出そうという考え方

は、後の社会主義リアリズムの理念にも繋がっていくものであり、1920-30年代ソ連において広範に共有されていた思考のモードであった可能性が高い。

ファクトの文学の方向性もまた、ヴォロンスキーやプロレタリア作家組織との論争を経て、1920年代末に徐々に定まってきたものである。ファクトの文学を実現形とするレフの「生活建設の芸術」の主張は、芸術を生活に融合させることを目指す生産主義理論と密接に関連している。これは、ヴォロンスキーの唱える、古典文学の価値規範をマルクス主義的に解釈した「生活認識の芸術」と、事あるごとに対置されてきた。他方、プロレタリア作家組織の文学論との関連では、この組織が1920年代後半に打ちだした人物造形法である「生きた人間」が注目に値する。これは、トルストイなどの古典に倣い、散文作品の登場人物の心理描写を強化しようとする主張であるが、レフの同人達はそれを、ステレオタイプに過ぎないと批判し、ファクトの文学の作品であるトレチャコフの伝記『鄧惜華』の实在する主人公を対置した〔ツアラムバーニ、2006〕ここから、フィクション対ノンフィクションという1920年代の芸術のリアルをめぐる問いについて、シェフェールのフィクション論やプラトンのミーメーシスを手掛かりに考察したい〔シェフェール、1999〕

以上のような研究を通じて、レフの活動を中心に、諸グループが割拠したポスト革命期ソ連文壇の全体像が、論争の展開と各グループの理論形成というダイナミズムをもって把握されることを目指す。

4. 研究成果

本研究は、従来の研究では専ら「実験精神」に起因するものとして理解されていた、1920年代のロシア・アヴァンギャルド散文をめぐる展開を、当時盛んであった文壇の諸グループ間の論争という文脈に位置づけ、広く文学史・文化史・芸術史の観点から説明づけた。これまでの初期ソ連文学研究をめぐる世界的な動向では、ロシアを中心に行われている文壇の論争の研究と、アメリカ合衆国を中心に行われているアヴァンギャルド芸術の研究は、別々の対象と認識され、2つの問題の間のつながりが明らかになっていなかった。両者の研究動向をとともに念頭に置き、アヴァンギャルドの散文を多視点的に再検証することによって、対象をより広範な歴史的な文脈に位置づけることに成功した点が、本研究の成果である。

本研究は、具体的には、1920年代のアヴァンギャルドの文学を、詩的散文、パロディー散文、ファクトの文学、の3局面に即して検証した。詩的散文については、散文の隆盛の陰でかつての勢いを失ってしまった詩のジャンルが、レフの周辺に位置するクルチョーヌィフらザーウミ派のアヴァンギャルド詩人によって、再興を図られていたことが明らかになった。関連する口頭報告「A. クルチョーヌィフと未来主義の遺産：詩人の1920年代の活動について」において、人気のある散文作家の作品を、ザーウミ詩に引き付けて解釈しようとする試みが行われたことを指摘した。パロディー散文については、レフの同人たちが欧米の大衆文学をパロディー化して作った散文作品が、背景として、プロレタリア派やヴォロンスキーが支持していた心理主義的リアリズム小説に対する反論を持つことを明らかにした。この成果は、論文「リアリズムと心理主義—1920年代文壇におけるレフとラップの闘争をめぐる」などで発表した。ファクトの文学については、たとえば、レフの活動の終盤になってようやくファクトの文学が登場するまでの経緯を、口頭報告「マヤコフスキーと生活建設の芸術：生産芸術の成立過程について」で発表した。この報告では、従来の研究で基本的に他のメンバーとの対立によって説明されてきた、リーダーであるマヤコフスキーのグループからの脱退が、散文のジャンルであるファクトの

文学に対する詩人としてのマヤコフスキーの違和感にも起因していることを指摘した。

研究期間中には、コロナ禍やウクライナ侵攻により、ロシアに渡航しての研究交流および資料調査が困難になるという、不測の事態に見舞われた。しかしその反面、EU やウクライナ、アメリカ合衆国の研究者との新しい交流が生まれた。また、ロシアの研究者とも、オンラインで講演をしていただくなどの交流を続けている。結果として現在では、研究開始当初よりも国際交流が活発化している。さらに、ロシアで資料調査ができないことの代替として、日本国内や西側諸国での資料収集にも着手した。このことで、1920年代の日本文学とロシア文学の影響関係にまで研究領域が広がることとなり、論文「蔵原惟人と「プロレタリア・リアリズム」：1920年代日本におけるプロレタリア文学」の発表につながった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 古宮 路子 | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 リアリズムと心理主義：1920年代文壇におけるレフとラップの闘争をめぐって | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 SLAVISTIKA | 6. 最初と最後の頁 29-42 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002005325 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 古宮 路子 | 4. 巻 35 |
| 2. 論文標題 映画から新聞へ セルゲイ・トレチャコフとファクトの文学 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 SLAVISTIKA | 6. 最初と最後の頁 509-524 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00080035 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 Michiko Komiya | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 The Problem of ' Knowledge ' in LEF and A. Voronsky ' s Literary Controversy | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 Interface | 6. 最初と最後の頁 5-15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6667/interface.23.2024.221 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件/うち国際学会 5件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 古宮 路子 |
| 2. 発表標題 ソ連知識人オレーシャの苦悩：ヴォロージャ像をめぐって（『オレーシャ『羨望』草稿研究：人物造形の軌跡』より） |
| 3. 学会等名 北海道スラブ研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Michiko Komiya |
| 2. 発表標題 Korehito Kurahara and “Proletarian Realism”: Proletarian literature in Japan in 1920s |
| 3. 学会等名 International Conference: The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 古宮 路子 |
| 2. 発表標題 生活と芸術 レフとA.ヴォロンスキーの文学論争 |
| 3. 学会等名 日本ロシア文学会第70回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古宮 路子 |
| 2. 発表標題 消された殺人のエピソード: Yu. オレーシャの戯曲『感情の陰謀』草稿研究より (ロシア語) |
| 3. 学会等名 国際学会「芸術テキストの変化の諸側面」(国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古宮 路子 |
| 2. 発表標題 マヤコフスキーと生活建設の芸術: 生産芸術の成立過程について |
| 3. 学会等名 国際学会「マヤコフスキー2023: 生誕130周年記念」(国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Michiko Komiya |
| 2. 発表標題 The Problem of “ Knowledge ” in LEF and A. Voronsky ’ s Literary Controversy |
| 3. 学会等名 INTERFACEing 2023 (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 古宮 路子 |
| 2. 発表標題 A. クルチョーヌィフと未来主義の遺産：詩人の1920年代の活動について（ロシア語） |
| 3. 学会等名 国際会議「スラヴ人文学の現在の諸問題：形式と意味。V. シクロフスキー生誕130周年記念」（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古宮 路子 |
| 2. 発表標題 パフチンとフォルマリズム：散文の「主人公」の問題を中心に |
| 3. 学会等名 多言語ワークショップ「異文化コミュニケーションの現在地 パフチンの 対話 を手掛かりに」 |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古宮 路子 |
| 2. 発表標題 ヴォロンスキーと19世紀リアリズムの古典 |
| 3. 学会等名 ワークショップ「Poliphony, Ideology and Cultural Memory」 |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計5件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 中村唯史、坂庭淳史、小椋彩（古宮は「アレクセイ・トルストイ『苦悩の中を行く』」の章を執筆） | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 256 |
| 3. 書名 ロシア文学からの旅 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Valerij Cretchko, Hey Hyun Nam, Susumu Nonaka, Soohwan Kim 編 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 Logos | 5. 総ページ数 432 |
| 3. 書名 Russian Culture on the Crossroads of History（古宮はpp. 189-199「1920年代における復古主義とヴァンギャルド：ファクトの文学の脱プロット散文について」（ロシア語）を執筆） | |

| | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 古宮 路子 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 成文社 | 5. 総ページ数 240 |
| 3. 書名 オレーシャ『羨望』草稿研究：人物造形の軌跡 | |

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 古宮 路子 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 ロゴス | 5. 総ページ数 176 |
| 3. 書名 「繊細美の放射」：オレーシャ『羨望』草稿研究（ロシア語） | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Shin'ichi Murata, Stefano Aloe 編 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 Firenze University Press | 5. 総ページ数 324 |
| 3. 書名 The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East (古宮はpp. 159-172「葦原惟人と「プロレタリア・リアリズム」：1920年代日本におけるプロレタリア文学」(ロシア語)を執筆) | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

| | |
|---|--------------------|
| 国際研究集会 I. オズヨールナヤ講演会「ユーリー・オレーシャと芸術家たちの時代：1920-40年代」 | 開催年 2022年～2022年 |
| 国際研究集会 I. オズヨールナヤ講演会「ユーリー・オレーシャの系譜とオデーサ時代（1902-1921年）」 | 開催年 2022年～2022年 |
| 国際研究集会 N. グローモワ講演会「1920-30年代ソ連文学の動向：ナタリア・グローモワ『「ウゼル」、詩人たち、友情と不和。1920-30年代文学生活の歴史』より」 | 開催年 2022年～2022年 |
| 国際研究集会 A. イグナートワ講演会「草稿から本へ：テクストロギアの課題、シリーズ「文学の記念碑」のための . オレーシャ『羨望』校訂を一例に」 | 開催年 2021年～2021年 |

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|